

「お前のこと
女としてみれねーわ」
って言ってた男友達と
えっちしちゃった話

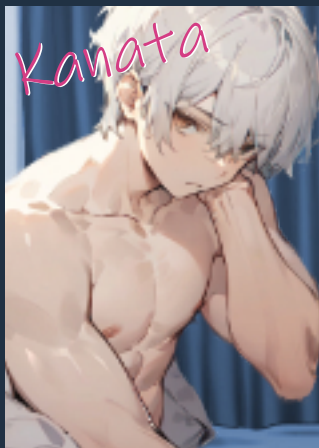


Character

來美

クルミ

- ・ 大学2年生
- ・ アウトドアサークル所属
- ・ サークルで知り合った先輩"直輝"と付き合っていたが、彼が大学卒業し、社会人になってからはだんだんと疎遠になり、フラれてしまった。
- ・ 奏汰の第一印象は「うわ、チャラそう」
- ・ 奏汰のことは確かにイケメンだとは思いますが、好みではない。
友達としては最高だと思っている。



奏汰

カナタ

- ・ 喫煙者(ヘビースモーカー)
- ・ 授業を頻繁にサボる
- ・ 來美と同じ授業をとっているのですが、テスト前はノートや課題を見せて貰っている。
- ・ 性格はキツいが、異常にモテる。
特定の相手を作らず女をとっかえひっかえしてる。
- ・ サークルの女には結構手を出してるが、何故か來美にだけは手を出さない。
彼いわく、來美は男友達のような存在で女としてみれない、らしい。

◆◆◆ プロローグ ◆◆◆

「ごめん、好きな人が出来た、別れて欲しい」

大学2年生の來美は突然、社会人の彼氏、直輝から別れを告げられてしまう。

直輝とは友達に誘われて参加したアウトドアサークルの新入生歓迎会で知り合った。

來美が入学した当時、直輝は大学3年生でサークル代表をしていた。しっかり者で誰にでも分け隔てなく優しい直輝に、來美は恋心を抱くようになる。

そして、夏休みのキャンプ合宿で二人きりになったところ、なんと直輝のほうから「俺たちつきあわない？」と告白され、二人は付き合うことになった。

直輝が大学を卒業し、社会人になってからも二人の関係は続いた。

しかし、ここ数カ月はデートに誘っても「仕事が忙しい」と断られ、会えない日々が続いた。

そしてつい先日、久しぶりに直輝の方からデートに誘われた。指定された店に向かったところ、突然「別れて欲しい」と言われフラれてしまう。

別れたくないと來美が泣きついでも、直輝の意思は固く、結局二人は別れることになってしまった。

その数日後、來美が大学のキャンパスを歩いていたところ、直輝の同級生で大学院に進学したサークルの先輩に出会う。そして、彼の口から衝撃の事実を聞かされる。

「アイツ、会社の女とできちゃった結婚したらしいよ？」

ショックを受けた來美は女友達を飲みに誘い、泣きじゃくりながら直輝への愚痴を女友達にぶちまけた。

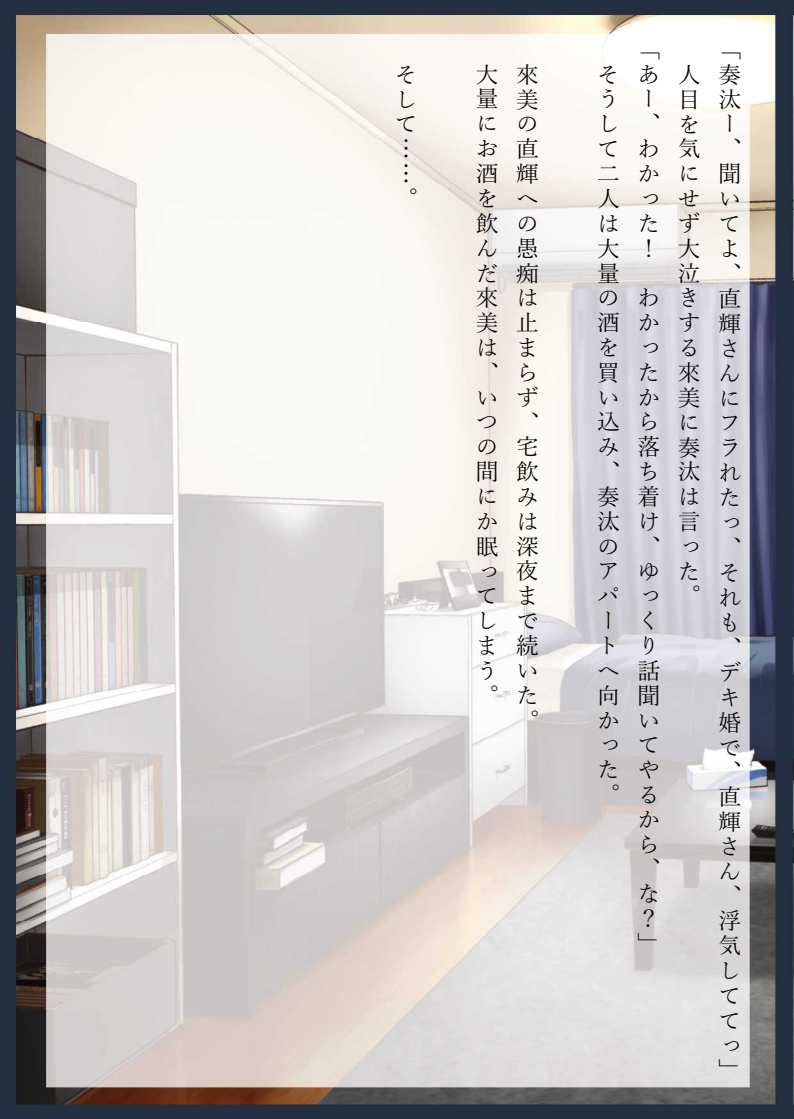
飲み会を終えて友達と別れ、最寄り駅へ帰ってきたもののまだ飲み足りず、來美はひとりでコンビニへと向かった。

お酒のコーナーでワインボトルを手を取ったとき、タイミングよく、男友達の奏汰がやってくる。

奏汰は來美を見て、開口一番にこう言った。

「うわっ、ひっでー顔、どうしたんだよ」

奏汰の顔を見た途端、直輝にフラれた悲しみが蘇ってきて、來美の目からボロボロと涙が溢れた。



「奏汰ー、聞いてよ、直輝さんにフラれたっ、それも、デキ婚で、直輝さん、浮気しててっ」
人目を気にせず大泣きする來美に奏汰は言った。

「あー、わかった！ わかったから落ち着け、ゆっくり話聞いてやるから、な？」
そうして二人は大量の酒を買い込み、奏汰のアパートへ向かった。

來美の直輝への愚痴は止まらず、宅飲みは深夜まで続いた。
大量にお酒を飲んだ來美は、いつの間にか眠ってしまう。

そして……。

「お前のこと女としてみれねーわ」
って言ってた男友達とえっちしちゃった話

烏帽子にぼし



「……くるみ來美」

誰かに名前を呼ばれた気がした。

だけど瞼が異様に重くて持ち上げることが出来なかった。

「おい、來美」

頬を撫でる指使いがとても優しくかった。

まだ半分夢の中に意識が漂っている状態でゆっくりと瞼を開くと、誰かがこちらを覗き込んでいた。

「……だれ？」

ぼんやりと滲んでいた視界が徐々にはっきりしてくる。

目を慣らすために何度かまばたきを繰り返す。

「來美」

目の前で直輝さんが微笑んでいた。

「な、直輝なおきさん、どうして……」

一週間前、突然一方的に別れを告げ、私の元を去って行った大好きな人。

ああ、直輝さん。

私のもとに戻ってきてくれたんだ。嬉しい。

あまりの嬉しさに涙が溢れた。

直輝さんはふつと優しく微笑むと、長い指でそつと涙を拭ってくれた。

私はゆつくりと直輝さんの頬に手を伸ばす。

「別れるなんて言うから、私、悲しかった」

直輝さんは何も言わず微笑んで、私の手にその大きな手をそつと重ねた。彼の骨張った長い指が私の指に絡む。

「直輝さん、好き……、今でも好き、大好き」

私は無意識に呟いていた。

すると直輝さんはふつと優しく微笑み、唇にチュツとキスを落とした。

愛しさが溢れて、直輝さんにギュツと抱きつく。

「お願いだから行かないで、もう別れるなんてこと、冗談でも言わないで」
指で顎を持ち上げられ、再び唇をふさがれる。

ちゅっ♡

「……んっ♡」

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡

何度も角度を変えながらキスが落とされる。

ああ、直輝さんのキス♡

嬉しい……♡♡

うっとりしながら彼のキスを受け入れる。

「んっ♡、ふう……っ、んん♡」

嬉しすぎて私はまた泣いてしまった。

ちゅっ♡

溢れた涙を拭うように直輝さんの唇が目元に落ちる。

「直輝さん……」

ああ、もっと、もっと、直輝さんを感じたい。

「直輝さん、お願い、抱いて……♡」

普段ならこんな恥ずかしいセリフ言えないはずなのに、このときは何故か素直に言葉にすることができた。

直輝さんはまたふっと優しく微笑むと、首筋に顔を沈めてきた。

首筋をざらりと湿ったものが這う。

その感触に体がぶるりと震えた。

「はぁ♡、……んっ♡」

直輝さんの手がTシャツの中に潜り込んでくる。

大きな手がお腹に触れ、さわさわと絶妙なタッチで肌を撫でられ、背筋がぞわりとした。

「ふっ♡……んぁぁ♡」

首筋に舌を這わせながら、お腹を撫でていた手を徐々に上へ移動させていく。

「はぁっ♡、うっ、んっ♡」

その手は進んでは戻るを繰り返し、円を描くようにゆっくりと肌の上を登っていく。

焦らすような動きに、私は体をよじらせて喘いだ。

「ぁぁ……♡はぁぁ……♡」

呼吸が荒くなっていくのが自分でもわかった。

体の奥の方がじんじんと熱を持ち始める。肌を撫でられるだけなのに、どうしようもなく感じてしまう。

大きな手がブラジャーの上から胸をそっと包んだ。

「はぁ……っ♡♡」

ふにゅう♡

やわやわと優しい指使いでブラの上から胸を揉まれる。

「んっ♡、ぁぁぁっ……♡♡」

ふにゅう♡ふにゅう♡

「はあっ♡、ああん♡」

ブラの生地に胸の突起が擦れる度に、やらしい吐息が溢れてしまう。

やがて片方の手が胸から離れ、背中の下にスツと差し込まれる。

その手は迷うことなく、ブラのホックへと向かった。

プツン♡

「あっ♡」

ホックが外され、胸の締め付けから解放される。

グイッとブラが押し上げられたかと思えば、彼の指が直接胸に触れた。

「ひゃあああっ♡♡」

初めは胸の形を確かめるようにすりすりとお撫でるだけだったが、だんだんと指に力が加えられ、もにゅ♡もにゅ♡と揉まれ始める。

「はう♡、はあん♡、ああっ♡♡」

いつの間にかTシャツが押し上げられて、白い双丘が照明の下に晒された。

「やっ♡、おねがい、電気消して、恥ずかしいよお」

いつもなら照明を暗くしてくれるのに、直輝さんは微笑むだけだった。

もにゅっ♡もにゅっ♡

「はああんっ♡♡」

もにゅっ♡もにゅっ♡

「あっ♡♡」

胸の頂きには一度も触れられていないにも関わらず、そこは痛いくらいにピンと張っていた。

直輝さんが白い乳房にゆつくりと顔を寄せる。

「あ、なおきさん……♡」

ちゅうっ♡

白い丘に柔らかな唇が落とされる。

「ひゃううっ♡」

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅうう♡

「はあっ♡、なおきさん……っ♡」

続いて直輝さんはツンと勃起した乳首に唇を寄せる。

じつと私を見つめながら、大きく口を開き、そして……。

パクリ♡♡

「あああん♡♡」

温かく湿ったモノが乳首を這う。

じゅっ♡じゅっ♡といやらしい音をたてて乳首を吸われると、つま先までビリリと電流が駆け抜ける。

「ああああっ♡♡♡」

ひとりでにびくびく♡と腰が小刻みに震えた。

「あっ♡、ああ……っ♡、んああ♡」

一方の胸は舌で転がされ、もう一方は大きな手にもにゅ♡もにゅ♡と揉みしだかれる。

「はああんっ♡♡ああん♡♡」

どうしよう。気持ちいい。

気持ち良すぎでどうにかなくなってしまいそうだ。

陰部からじわじわと蜜が染み出ている感覚がした。思わず太股を摺り合わせる。

もともと濡れにくい体質で、ローションが無いと痛くて挿入出来ないことが多かったはずなのに。

胸を揉んでいた手が離れ、腰にするりと伸びる。

脇腹からおへそのあたりを絶妙なタッチでさわさわと撫でられる。

「あっ♡ああ……っ♡」

その時、直輝さんの手がするりと太股の間に滑り込んだ。

内腿の肌が薄い部分を指先でっつとなぞられ、ゾクリと背筋が粟立った。

「ああ……っ♡♡」

ああ、すごく気持ちいい。

「はぁあ……♡♡♡」

あまりの気持ちよさに吐息が溢れる。

顔を上げると、直輝さんは穏やかな顔で私を見つめていた。

今日はどうしちゃったんだろう、直輝さん。

何だかいつもと違う。

こんなに長い時間をかけて愛撫してくれることなんてなかったはずだ。

そんなことを考えていると、内腿を撫でていた彼の手が、足の付け根に移動した。

「はううう♡♡♡」

彼の指がショーツに触れる。その途端、ショーツからじゅわつと愛液が染み出てくる感覚があった。

やだ、うそでしょ♡

こんなに濡れるなんて♡

秘裂の形をショーツの上から確かめるように指先がゆつくりと動かされると、自然と熱を帯びた嬌声が唇から溢れてしまう。

「んっ♡、はぁ♡、あぁあっ♡」

それまで割れ目をなぞっていた指がすーっと上の方へ進み、ショーツの下で固くなって

いた花芽に触れた。

「ああああっ♡♡♡」

腰がビクンツと大きく跳ねる。

指先で円を描くようにクリトリスを撫でられる。布一枚挟んで触られる感覚が焦れつくもあり、それでいてどうしようもなく気持ちいい。

「んああ♡、はああんっ♡♡」

クリトリスを刺激されると、ひとりでに腰がブルブルと震えてしまう。

「あうっ♡」

彼の指がショーツを押しわけ、中に入ってきた。

その指は迷うことなく、小さく勃起したクリに触れた。

「——っ、あああっ♡♡」

こすこす♡♡

指先が執拗にクリを責める。さきほどショーツ越しに触れた時とは比べものにならない快感が私を支配する。

「あああっ♡♡、だめえっ……♡♡」

絶頂の波がすぐそばまで迫って来ていた。

彼の指は優しく、しかし確実に私を絶頂へと誘う。いざな

「あっ♡、だめ♡♡、いつ、いつちゃうっ♡♡、はあっ♡、んっ♡、あああっ♡」

体の奥底で何かが弾けた。

「——っ♡♡♡」

ビクンッ♡♡と腰がひとりでに宙に浮く。

「あああああゝゝっ♡♡♡♡!!」

抗いようのない快感の波に襲われ、淫らな声をあげた。

「ああっ……♡はあああっ♡♡」

ビクン♡ビクン♡と絶頂の余韻で腰が細かく震える。私は目を閉じ、それを全身で受け入れるしかなかった。

「はあ♡はあ♡はあ……♡♡」

必死に呼吸を整えていた時、

にゅぷっ♡♡♡

「はああんっ♡♡♡♡」

長い指が秘裂を破って中に侵入してきた。

「んああ♡♡」

イッたばかりで僅かに痙攣しているナカを骨張った指がゆっくりと動く。

「はあ♡、んっ♡、ああっ♡♡」

肉壁を指の腹で擦られる度、腰がビクビクと痙攣してしまう。

その指使いは大胆だったけど、決して乱暴ではなく、優しいタッチだった。

「んっ♡、ああ♡♡♡」

心地よい指使いに、自然と甘い吐息が溢れた。

ああ♡♡すごく気持ちいい♡♡

視線を上げると、直輝さんは私を見つめて静かに笑っていた。

本当にどうしたんだろう、直輝さん。

いつもと全然違う。

どちらかというと、直輝さんは激しい指使いを好んでいた。

もともと濡れにくい体質だったから、たまに激しくされると痛くて泣きそうになったこともあった。

だけど、今日は違う。

直輝さん、どうしちゃったんだろう。

「んっ……♡、はあ♡……あんっ♡♡」

直輝さんの指が腹側のとある部分に触れると、他の部分とは違う強い快感を覚えた。

「あぁっ♡、んん♡、はぁんっ♡」

そこを優しく擦り上げられる度に、腰がぶるぶると震え、淫らな声が溢れてしまう。

「あぁっ♡♡♡」

腰の辺りと撫でていた手がゆっくりと上へ登っていく。触れるか触れないかの絶妙なタッチで肌に触れられ、体がビクビクと震えた。

やがてその手は、胸にたどり着いた。

むにゅっ♡

「はううっ♡」

胸の柔肉が大きな手に包まれる。

「あんっ♡♡あぁあ……っ♡♡」

大きな手でやわやわと胸を揉まれる。その優しいタッチに吐息が溢れる。

一方、陰部に沈められた指は、Gスポットを優しく刺激し続けていた。

胸と陰部を同時に刺激され、とてつもない快感が押し寄せてくる。あまりの気持ちよさに思わず目を瞑った。

「……んっ♡♡はぁあっ♡♡」

こんなに気持ちのいい愛撫は初めてだった。

直輝さんが私の元に帰ってきてくれて、その上、こんなに気持ちいいえっちが出来るな

んて。

まるで夢みたいだ。

ん？ ……夢？

ゆっくりと目を開く。

すると、直輝さんと目が合った。

さっきからずっと直輝さんは穏やかな表情を浮かべたまま、口を閉ざしている。汗ひとつかかず。

ここで私はやっと気づく。

そうか。

これは夢なんだと。

直輝さんは別れを告げて、別の女の人と結婚した。

きっとこの夢は直輝さんを想いすぎるあまり、私の潜在意識が見せた幻想なんだ。

そうか、夢か。

夢と自覚した瞬間、急に虚しさが押し寄せてきた。
それと同時に私はどうせこれは夢なんだからと開き直ることにした。

「んっ♡直輝さん、もっと激しくして……♡」

素直な言葉を口にする、それまで様子をうかがうような優しいタッチだった愛撫が激しくなる。

「はうっ♡♡♡」

胸の先端を2本の指でキュッと抓られた。その途端ビクン♡と腰が浮く。

指が食い込むほどの強さで揉みしだかれる。

中に潜っていた指は2本に増やされ、ランダムにかき混ぜられる。内側からじわじわと染み出てくる愛液がかき混ぜられてじゅぷ♡じゅぷ♡といやらしい水音をたてた。

「はぁあんっ♡♡♡」

中を暴れ回っていた指がGスポットを集中的に押し上げる。

「あぁっ♡♡♡、そこっ♡♡♡、いいっ♡♡♡、もっとしてえ♡♡♡」

夢だと分かっているからか、素直な言葉を口にすることができた。

付き合っている時は、えっちの最中にこんなふうに素直におねだりすることは出来なかった。

もっとうしていれば、直輝さんと別れずに済んだんだろうか。

後悔が押し寄せてくる。両目から涙が頬を伝って落ちていった。それが快樂からくる生理的な涙なのか、それとも直輝さんへの未練の涙なのか、自分でもわからない。

「ああ♡♡、いい♡♡、ん♡♡もういく♡♡」

腰をくねらせて淫らに喘いだ。

相変わらず直輝さんは笑みを浮かべたまま、私を見つめている。

ああ、なんて気持ちいいんだろう。

「ああ♡♡、いく♡♡、い♡♡ち♡♡や♡♡う♡♡♡♡、ああ♡♡♡♡、あああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

ビクン♡♡♡♡♡

腰が大きく腰が跳ね上がり、内襲が激しく痙攣した。

中に収まっていた彼の指をギュウギュウと締め付けた。

「はあああ♡♡♡♡♡」

私は目を瞑り、絶頂の余韻を噛みしめていた。

やがてゆっくりと陰部から指が引き抜かれる。

「……ん♡♡♡♡♡」

私はゆっくりと目を開いた。

直輝さんは穏やかな表情のまま私を見下ろしていた。
ああ、私、やっぱり、今でも直輝さんが好きだ。

「直輝さん、どうして私を捨てたの？」

「……」

直輝さんは微笑むだけで答えてくれない。

いかないで。

ここにいて。

寂しい。

つらい。

色んな感情が私の中に湧上がってくる。

「会社の人と結婚するってなに？　ずっと二股してたってこと？」

「……」

「結婚するなら来美みたいな子が理想だなんて言ってたのに……あれは嘘だったの？」

「……」

「その気が無いならあんな期待させるようなこと言わないでよお、ひどいよ」

「……」

「私はまだ、こんなに直輝さんのことが好きなのに……」

「……」

やっぱり直輝さんは微笑むだけで何も言ってくれなかった。

「ねえ、直輝さん、何か言ってよ」

微笑んだままの直輝さんをじっと見つめる。

すると、それまで笑みを浮かべていた直輝さんが突然、苦しそうに顔を歪ませた。

「やっぱり好きだ……お前のこと」

直輝さんはそう言ってそっと私の頭に触れた。

「直輝さん……っ」

その優しい指使いに、体がぶるりと震えた。

髪には神経が通っていないはずなのに、髪を撫でられるだけで性感帯に触られように体中にビリビリと電流のような快感が走った。

直輝さんの顔がゆっくりと降りてくる。

目をゆっくりと瞑ると、唇に柔らかないものが重なった。

「……んっ♡」

チュッチュッと何度も角度を変えながらキスが落とされる。

「なおきさっ……んっ♡♡」

キスの合間に彼の名前を呼ぶと、ぬるりとした熱いものが唇を割って入ってきた。

「……んむうっ♡、んんっ♡」

舌の根元から絡め取られる。互いの粘膜が擦れ合う感覚につま先まで快感が駆け抜けていく。

「ふっ♡、……んむっ♡♡」

煙草の香りが口いっぱいに広がった。

ここで私は違和感を抱いた。

おかしい。

直輝さんは煙草を吸わなかったはずだ。

しかし、そんな疑問もすぐに頭の隅に追いやられた。

上顎をざらりとした感触が這う。その感触にゾクリと背筋が粟立つ。

「……ん♡♡、ふうっ♡んんっ♡♡」

ああ、すごく気持ちいい。

もう、夢でも幻想でも何でもいい。

もっと直輝さんと繋がりたい。

私はゆっくりと目を閉じて、直輝さんの背中に手をまわした。

「んっ……♡」

しつとりと濡れた肌が私の手に吸い付く。

筋肉質な背中だった。

あれ、おかしい。

直輝さんはもつと細身だったはずなのに。

そう思いつつも、彼のキスを受け入れながらゆっくりと指を滑らせる。

彼の首に掛かっていたタオルに触れた途端、それがするりと滑り落ちた。

指先を彼のうなじに滑らせると、髪が微かに濡れていた。

短い髪を指に絡ませる。

その髪は太く、少しきしんでいた。まるでブリーチのし過ぎで痛んだ髪みたいに。

あれ？

直輝さんの髪は猫っ毛で体質的に合わないから言って、カラーリングはせずずっと黒髪だった。

感じていた違和感がより濃厚になる。

直輝さんの頬に触れ、私はゆっくりと瞼を開いた。



「んっ……」

瞼が異様に重かった。

視界が白くぼやけてよく見えない。それに体がだるい。

頭が痛いし、少し吐き気がする。

唇に違和感を抱く。

なにか柔らかなものが押し当てられている。

「……？」

目の前で銀色の髪が揺れていることに気づく。

何度かまばたきをすると、だんだんと視界が鮮明になってくる。

すると、薄いブラウンの瞳と目が合った。

「……っ!？」

なんと、そこにいたのは奏汰だった。

私の唇に触れているのは紛れもなく奏汰の唇で、私の手は奏汰の頬に添えられていた。まだ半分夢の中にいた意識が、一気に覚醒する。

ど、どうして私奏汰とキスしてんの!?

慌てて奏汰の胸を押して起き上がる。

ゴンッ!

運が悪いことに、起き上がった拍子に奏汰の顎がおでこにぶつかってしまった。

「……っ」

顎をさすりながら颯太が小さく唸る。

奏汰は半裸でハーフパンツを穿いていた。シャワーを浴びたまま髪を乾かしていないのか、ブリーチのし過ぎで傷んだ髪から水が滴り落ちている。

何これ？

一体どういうこと？

私は軽いパニックに陥っていた。

「か、奏汰、どうして……キスなんか」

「は？」

顎から手を離れた颯太は眉間に皺を寄せ、私を睨みつけた。

「どうしたも何も……お前が誘ったんだろ、抱いてくれって」

「なっ……」

奏汰の言葉に顔がカーッと熱くなる。

「ば、ばっかじゃないの!? そんなこと私が言うわけなっ……え？」

ここで私はようやく自分の置かれている状況に気がつく。

Tシャツとブラジャーが押し上げられていて、白い乳房が丸見えの状態だった。ボトムスはいつの間にか脱がされ、テーブルの下で丸まっていた。

唯一、下半身を守っているのはショーツだけだった。

う、うそでしょ？ わたし、寝ぼけて奏汰と……？

うそ、絶対うそだ!!

え、キスだけだよね？

わたしたち、いったい、どこまで……。

「やっ……」

慌ててシャツの裾を引き下ろす。

しかし、いくらオーバーサイズのTシャツだからといって、ショーツまでは隠すことが出来ない。咄嗟に近くのクッションを掴んで隠した。耳の先まで熱い。

私は奏汰の顔を見ることが出来なかった。

「ち、ちがう、夢見てたの、夢に直輝さんが出て来て、それで、その……」

「……」

「も、もし仮に寝言を言ってたとしたら、それは、その、直輝さんに言った言葉で……」
奏汰が何も言っていないことに違和感を覚えて、おずおずと顔を上げた。

「……」

奏汰は無表情で私を見下ろしていた。

顔立ちの整った人間が無表情になると異常に怖い。

「ふうーん」

しばらくして、奏汰は意地の悪い笑みを浮かべた。

「お前、アイツの前ではあんなにやらしい声で喘いでるんだ」

「……っ!？」

え、嘘、わたし、寝ながら喘ぎ声出してた……？

恥ずかしさでカッと体温が上がる。

「いや、ちがつ、そんなわけな……わっ」

言葉の途中で、突然トンッと肩を押された。

「あっ」

そのまま私の体はぐらりと後ろに倒れ、カーペットの上に仰向けにされてしまう。

奏汰の長い腕がトンッと私の顔の両脇に降ろされた。

照明が奏汰の顔で遮られ、視界が僅かに暗くなった。

奏汰と目が合う。

熱を孕んだ瞳がじっと私を見つめている。

「……………」

奏汰のこんな表情初めて見た。

普段は見せない雄の顔をしている。

凄まじい色気だ。

ただ見つめられただけなのに、体の奥のほうがじわりと熱くなるのを感じた。

奏汰の手がゆっくりと動く。その手は私の頬に向かってくる。

だめだ、このままだと雰囲気流されてしまう。

……それだけは絶対に駄目!!

「な、なにすんのよっ!」

パシンッ

咄嗟に上体を起こして、奏汰の頬を思い切り叩いた。

「……っう」

奏汰が小さく唸る。思いのほか力が入ってしまい、叩いた右手がジンジンと痛む。

奏汰が眉間に皺を寄せ、私を睨んだ。その薄い唇の端が血で滲んでいた。

「ってーな、口切れたわ」

さすがに叩くのはやり過ぎだったと反省する。

「あ、ごめっ」

「はぁー……」

奏汰は大袈裟にため息をつき、切れた唇を手の甲で拭った。

その動作が妙に色気を孕んでいて、それを見た途端、ゾクリと背筋が粟立った。

「……ホント腹立つ、お前」

奏汰はひどく冷めた目で私を見下ろす。

「ご、ごめん、謝るから」

「はっ、今さらおせーよ」

奏汰はクッションを私の手から剥ぎ取り思い切り後ろに投げた。それが飲みかけのワインボトルに当たってしまう。そのままボトルがテーブルから転がり落ち、ラグに赤いシミを作った。

「あつ」

再び奏汰に肩を掴まれ、無理矢理押し倒されてしまう。

「ちよっ……かなた、やめっ」

抵抗しようと奏汰の胸を思い切り押したけどびくともしなかった。

「なにす……あつ」

それどころか両手首を掴まれ、そのまま頭の上で一纏まりにされてしまった。

奏汰は片手で私の手首を押さえ込んだまま、器用にもう一方の手でTシャツの裾を乱暴に捲った。

「やっ……」

明るい照明の下、ツンと立ち上がった薄紅の乳首と白い乳房が晒されてしまう。

「かなた、ほんとやめてっ、離してっ」

必死に抵抗するけど奏汰の手はびくともせず、無意味に体をくねらせるだけに終わった。

奏汰の無駄に整った綺麗な顔が、無防備に晒された胸に寄せられる。

「かなた、だめっ、ほんとにこれ以上は……っ」

その薄い唇が胸の頂きに触れるか触れないかくらいの距離まで迫る。

奏汰の吐息が胸の先端にかかるだけで、体の奥がじわっと熱くなるのを感じた。

奏汰は私をじっと上目遣いに見上げながら、チロリと舌を出す。

「奏汰、だめっ、ほんとにだめ、やめ……っ」

奏汰はふっと笑うと、ツンと立ち上がった胸の先端をペロリと舐め上げた。

「はぁあんっ♡♡♡」

ビクン♡と腰が跳ね上がった。

「あっ♡♡、だめ、かなた、あぁっ♡♡」

ざらりと湿ったものが敏感な乳首を這うたび、腰からつま先までピリピリした感覚が走る。

「あぁっ♡、も、ほんと、やめ……はぁあん♡♡」

乳首を舐められる度にゾクゾクと背筋が粟立ち、自分の声とは思えない嬌声が唇から溢れ出てしまう。

逃げようにも両手を頭の上で拘束されているため、体をくねらせることしかできない。

「んぁぁっ♡、かなた……っ、やめ、あぁぁっ♡♡♡」

今度はチロチロと小刻みに舌先で先端を弄ばれる。

「あううっ♡♡あぁぁ♡♡かなたっ♡……んっ♡だめえ♡あっ♡もうやめてっ♡♡」

今すぐここから逃げ出したいのに、両手を拘束されてしまつて抵抗することも出来ない。そんな私を見て奏汰はニッと意地の悪い笑みを浮かべた。そして、挑発するような上目遣いで私を見つめたまま、奏汰が大きく口を開く。

「あっ……だめっ♡♡」

そのまま奏汰は、乳首にかぶりついた。

ちゅううううっ♡♡♡

「はうううっ♡♡♡」

乳首への直接的な刺激に耐えられず、背を弓なりにして喘いだ。

「あっ♡♡ああっ♡♡」

ちゅぷっ♡じゅるっ♡

じゅるるるるるっ♡♡

わざとらしく水音をたてながら乳首を吸われる。

「ひゃうう♡、やめっ……ああ♡♡、ああん♡」

突然、乳首を歯で甘噛みされたかと思えば、歯で乳首を固定された状態でチロチロと舌先で刺激される。

「はああっ♡♡あっ♡♡チロチロだめえ♡♡」

もにゅっ♡♡

もう一方の乳房は驚づかみにされる。

「あああっ♡、……んっ♡ああああっ♡♡」

もにゅっ♡♡

ちゅうっ♡じゅるるっ♡♡

ツンと立ち上がった胸の頂きを指でキュッと摘ままれた瞬間、ビクンと腰が宙に浮く。

「やっ♡♡んああ♡♡、それだめえ♡♡はああんっ♡♡」

奏汰は乳首から口を一瞬離し、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「ふーん、乳首弱いんだ？」

「……っ♡♡」

言葉に詰まると、奏汰はニヤリと笑って、上目遣いに私を見ながら再び唇を胸の先端に寄せる。

「あ、だめ……っ♡♡」

私をじっと見つめながら奏汰は唇を大きく開いた。

ちゅうっ♡

「あっ♡♡♡」

じゅるるるるっ♡♡♡♡

ちゅうううっ♡♡じゅるるるるるっ♡♡♡♡

乳首が取れてしまいそうなほどに強く吸引される。

「はああああっ♡♡♡♡♡♡」

じゅるるるるっ♡♡

レロレロレロ♡♡ちゅうっ♡♡♡♡

じゅるるるるっ♡♡♡ちゅぷっ♡♡じゅるるるるっ♡♡♡♡

「ああ〜♡♡やめてえええ♡♡♡♡」

もう一方は、指で乳首をピンと弾かれたり、くりくり♡と指の腹で押しつぶされたり、

あらゆる方法で刺激を与えられる。

くりくり♡♡ぎゅっ♡♡

じゅるるるるっ♡♡ちゅっ♡♡ちゅううっ♡♡じゅるるるるるるっ♡♡♡♡♡♡♡♡

「あぁっ♡♡はぁんっ♡♡あぁあぁあぁっ♡♡」

両胸を好き勝手にされ、私はだらしなく喘ぐことしかできなかった。

「あぁんっ♡♡やっ♡♡ほんと、だめえ♡♡かなたっ♡♡も、やめてっ♡♡」

「やめて？ ……こんなによがってるのに？」

奏汰は唇を歪めて笑い、キュッと強めに乳首を摘まんだ。

「はぁぁんっ♡♡♡♡」

ビクンッ♡♡と腰が浮き、いやらしい声が漏れ出てしまう。

「そんな喘いでちゃ説得力ねえなあ」

奏汰は鼻で笑うと、再び乳首にかぶりついた。

じゅるっ♡♡じゅっ♡♡ちゅうううっ♡♡♡♡じゅるるるるるるるっ♡♡♡♡♡♡♡♡

わざとらしく音を出しながら乳首を強く吸われる。

「んぁぁぁぁっ♡♡♡♡」

だめ♡♡抗えない……っ♡♡

感じすぎておかしくなるっ♡♡♡♡♡♡

無理矢理されているというのに、こんなによがってしまう自分が情けなかった。

どうしてこんなことになってしまったんだろう。

奏汰はただの男友達だったはずなのに。

私のことは女として見ていないと断言していたはずなのに。

それなのに、どうして……。

「おい」

「……へっ？」

奏汰の声で現実引き戻された。

「お前、今、別のことを考えてただろ？」

奏汰は不機嫌そうに私を睨んだ。

「こんな状況で考え事なんて随分と余裕だな？」

奏汰は嫌みたらしくそう言うのと、片手でショーツを掴み、膝下までずり下ろした。

「ひゃあっ♡」

咄嗟に足を閉じたけど、奏汰が太股の間に手を差し込む方が数秒早かった。

下半身を覆うものが無くなり、薄紅色の花弁が丸見えになってしまう。

「やっ♡だめっ♡」

奏汰の指先が陰部に触れた。

ビクンッ♡と腰が跳ねる。

「あああんっ♡♡」

蜜に濡れた秘裂の形をなぞるように、奏汰の指先がゆっくりと動く。

「はぁあんっ♡♡」

奏汰は私を見下ろして薄く笑った。

「ははっ、さっきより濡れてんじやん」

さ・っ・き・よ・り・濡・れ・て・る・？

それってつまり……。

「あっ♡ほんとやめっ……あああっ♡」

秘裂を撫でられるたびに、内側からじわりと蜜が染み出てくる。

「やめてとか言いながら、こんなに濡らして、やらしー♡」

「ちがっ……、んぁあっ♡♡」

口で必死に抵抗しても、感じてしまっているのは事実だ。

説得力がまるでない。

奏汰はニヤリと笑って、顔を胸に近づけた。

何をしようとしているか察した私は、必死に奏汰を止めた。

「あ♡ ちよつと、かなた、それはだめっ、やめてっ♡」

ふつと笑うと、奏汰はツンと勃起した胸の先端を口に含んだ。

ちゅぷっ♡

ちゅうううううううっ♡♡

容赦なく乳首を吸われ、思考が霧散する。

「あゝっ♡♡、やめっ♡ああんっ♡♡」

じゅるるるるっ♡♡

チロチロ♡♡

ちゅうっ♡

じゅるるるるるるっ♡♡♡♡♡♡

「んはあっ♡♡ちくび、らめええっ♡♡あああんっ♡♡」

乳首への直接的な刺激に耐えきれず、私は体を仰け反らせた。そのせいで、太股の力が弱まってしまふ。

奏汰がそれを見逃すはずもなく。足の力が抜けたその隙に、中途半端に膝の上に留まっていたショーツを膝からつま先まで引き下ろし、足から完全に抜き取ってしまった。

「やっ♡♡」

にゅぷっ♡♡

骨張った長い指が秘裂を破ってナカに侵入してきた。

「~~~~っ♡♡♡」

しつとりと濡れたそこは、簡単に奏汰の指を受け入れてしまう。

「あっ♡♡やっ♡だめえっ♡♡ぬいてえ♡♡あぁっ♡♡」

じゅぷっ♡じゅぷっ♡じゅぷっ♡

奏汰の指がゆっくりと抜き差しされる。

「……っ♡♡あぁっ♡♡はぁぁんっ♡♡」

照明の下、奏汰の指が自分の陰部に沈んでいる様をありありと見せつけられる。

うそ……っわたし、こんなに濡れてる♡♡

直輝さんとのえっちでは指を受け入れるのも、ローションなしでは痛くて無理だったはずなのにつ♡♡

にゅぷぷっ♡♡

「あぁあぁ~~~~っ♡♡」

二本目の指が蜜口を破って侵入してきた。

じゅぷっ♡♡じゅぷっ♡♡

「はぁあぁっ♡♡あぁぁん♡♡」

二本の指が中をランダムで動き内襞を刺激する。

その間も乳首は舌先でチロチロと舐られ、どうしようもなく感じてしまう。

「んあぁっ！ あっ♡♡だめ♡♡、かなたっ……、ほんと、いいかげん、やめてっ」

私は奏汰を思い切り睨みつけた。

すると奏汰は乳首から唇を離し、ふっと口元だけ笑った。

「それで抵抗してるつもり？ そんな顔で言われても煽ってると思えないんだけど」

「も、ほんとに、やめ……ひゃうっ♡♡」

指が内部で曲げられ、その指先が腹側のある部分に触れた。

ぐっとそこを押し上げられると、ビクン♡♡と腰がひとりでに飛び上がった。

「ああん♡♡♡」

「ふっ、やっばここ弱いんだな」

奏汰は笑いながら、指先でそこを的確にぐりぐりと押し上げた。

「やっばって……どういう、あっ♡♡ああ〜っ♡♡♡、そこっ♡♡だめええっ♡♡」

奏汰の発言で私は理解した。

さっきまで見ていた直輝さんとのえっちな夢。

そう、あの夢の中で感じていた、蕩けるようなキスも、肌に触れる優しい感触も、ナカを犯した指使いも、全部、奏汰だったってことを。

「んん♡♡♡」

悔しい。

こんな奴に喘がされるなんて。

「はぁんっ♡、んっ……あぁっ♡」

認めたくない。

奏汰の手で、こんな簡単に乱されてしまっている自分を。

私は顔を逸らしてぐっとう唇を噛んだ。

「うぐっ♡ んっ♡♡うっ♡、ふぁっ♡♡、むっ♡んんんっ♡」

唇を必死に閉じてても、内襲を指で擦られるたびに声が漏れ出してしまう。

「んんんんっ♡♡」

その時、首筋をざらりと湿ったものが這った。

ちゅうっ♡♡

首筋を強く吸われ、つま先まで快感が走る。

「やっ♡♡んんんっ♡♡」

耳元に唇を寄せた奏汰が呟いた。

「そんなに噛むと血がでるぞ」

奏汰の熱い吐息が耳にかかり、ぞくりと体が震える。

私は意地になってさらにギュッと唇を噛んだ。

「……ふっ、強情だな」

耳元で奏汰が笑う。その吐息が耳にかかり、肩がビクンと上下した。

「んんっ♡」

はむはむと耳朵を甘噛みされたかと思えば、ぴちゃっ♡ぴちゃっ♡と耳に熱く湿ったものが這う。

「ふああっ……♡」

ゾクゾクッ♡♡

ぴちゃっ♡ぴちゃっ♡じゅっ♡じゅるるっ♡

耳を舌で犯される。近距離で聞こえるいやらしい水音に全身が鳥肌立つ。

「あうっ♡やっ……♡♡やめてっ♡♡」

たまらず顔を正面に戻すと、舌が耳から離れた。はあ、はあと呼吸で胸が上下する。視線を上げると奏汰と目が合った。

「——っ♡」

目が合った瞬間、子宮の奥のほうがキュンッと絞まった。

奏汰は顔をゆっくりと近づけてきた。鼻先が擦れるくらいの距離で奏汰はふっと笑い、ちゅっつと薄い唇を重ねた。

「んっ♡」

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡

角度を変えながら何度もキスされる。

「ふっ♡んんっ♡」

キスの雨がやんだかと思ったら、奏汰の舌が私の唇の形をなぞるように舐めた。

「んっ♡はぁ……っ♡」

そのこそばゆい感覚に思わず口を開いてしまう。

熱い舌が唇を割ってにゆるり♡と口内へ侵入してくる。

「はっ♡……むうっ♡♡」

歯列をなぞられ、上顎を押し上げるように舐められる。

どうしようもなく感じてしまい、唇の間から声が漏れてしまう。

「ふぁぁっ♡♡、んふっ♡……んんっ♡」

根元から舌を絡め取られ自由を失う。

「ふっ♡、……んむっ♡」

互いの粘膜が擦れる度に、全身に甘い疼きが広がる。互いの唾液が混ざり合い、口内に溜まっていく。唾液の海で溺れそうだ。

「んっ♡……んんっ♡♡」

かろうじて鼻から呼吸をする。

苦しい。

だけど、どうしようもなく気持ちいい……っ♡♡

「んっ♡……んぁっ♡♡♡」

しばらくの間、秘部に沈められたまま緩慢になっていた指の動きが、突然再開される。
じゅぷっ♡じゅぷっ♡

いやらしい水音をたてながら、奏汰の指先がGスポットを集中的に擦り上げる。

「んんっ♡♡、んむう♡、……っ♡♡、んんんんっ♡」

あ、ヤバイ♡♡

このままだと、私……っ！

その時、唇が解放された。

空気を求めて息を大きく吸うが、次の瞬間には内襲への刺激に耐えられず喘いでしまう。

「はぁ……っ♡、あぁあっ♡♡」

奏汰の指がナカで暴れまわり、感じる部分を集中的に責められる。

「あぁっ♡♡だめえ♡、おねがいっ♡、やめっ、あぁあっ♡♡、かなたっ♡だめえっ♡」
目の前がチカチカし出して、自分の体が限界を迎えようとしているのがわかった。

私を見下ろす奏汰は、薄く笑いながら言った。

「ほら、いけよ」

じゅぷっ♡じゅぷっ♡じゅぷっ♡

「あっ♡♡あぁんっ♡♡やだあっ♡♡、うそっ♡あっ♡あぁ♡♡」

やだ……っ

このままじゃ、私、また奏汰にイカされちゃうっ♡♡

奏汰はふっと笑うと耳元に唇を寄せた。吐息が耳にかかり、背筋がゾクリと震える。奏汰が低い声で囁いた。

「いけ」

指先がGスポットをぎゅうっ♡♡と押し上げた。

その瞬間、私のナカで何かが弾けた。

「——っ♡、んあああああ~~~~っ♡♡♡♡」

ピクンッ♡♡♡

腰が大きく跳ね上がり宙に浮く。

内臓が収縮し、奏汰の指をギュウギュウと締め付けた。

うそ♡信じられない。

私、また中イキさせられちゃった……♡♡♡

まだナカはピクピクと痙攣している。肩で息をして荒い呼吸を整えながら、長い余韻に私は体を震わせていた。

直輝さんとのセックスでは、ナカへの刺激だけじゃイクことができなくて、クリトリスへの刺激なしで絶頂を迎えたことはなかった。

だから、ナカだけでこんな絶頂を味わったのは生まれて初めてだった。

中イキってこんなに気持ちいいの？

知らなかった……♡♡

いつの間にか拘束されていた手首が解放されていた。

だけど、私には抵抗する気力など残っていなかった。ぐったりと床に倒れたまま荒い呼吸を整えることしか出来なかった。

「はあああ……っ♡♡」

ずるりと奏汰の指が陰部から引き抜かれる。

「んああっ♡」

奏汰の指は透明な液で濡れており、照明の光でテラテラと光って見えた。

奏汰は私を見下ろしながら、私に見せつけるようにその指先をペロリと舐めた。

「……っ♡♡♡」

その光景に子宮の奥がキュンと跳ねる。

奏汰はおもむろに私の横にやって来ると、私の上半身を抱き起こした。

そして胸の上で絡まっていたTシャツとブラを器用に抜き取り、そのまま後ろに放り投げた。あまりの手際の良さに声をあげる暇も無かった。

奏汰は背中と膝下に腕を差し込むと、ひょいっと私の体を抱き上げた。

ふわりと体が宙に浮く。

お姫様抱っこなんて今までされたことがなかった私は、落ちるのではないかと不安になった。しかしそれも一瞬のことで、気づいた時には私の体ベッドに仰向けに寝かされていた。

ギシッ

奏汰が膝をベッドに乗せるとベッドのスプリングが軋んだ。奏汰は私の足の間に腰を下ろすと、奏汰は私の両足を掴んで持ち上げて、M字の形に開かせた。

「や、やだっ♡」

明るい照明の下に私の陰部が晒される。

「み、みないでっ」

必死に足を閉じようとするけど、足の間に奏汰が座っているから無駄だった。膝の内側を奏汰の手腕に押しつけるだけに終わった。

両太股を手でがっしりと固定すると、奏汰はゆっくりと顔を降ろしていく。

「ちょ、ちょっと、かなた、なにを」

膝の内側に唇を寄せると、ちゅっ♡とキスを落とす。

「あぁっ!!♡♡」

ちゅっ♡ちゅううっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡

「はっ♡……あぁっ♡」

キスをされる度、ゾクゾクとした感覚が背中に走る。

ちゅ♡ちゅっ♡ちゅう♡♡

「んぁっ♡」

キスの雨は、膝からどんどん体の中心へと向かって行く。

ちゅっ♡ちゅっ♡

足の内側は皮膚の薄いせいか敏感で、奏汰の唇の感触がより生々しく感じる。

ちゅっ♡ちゅううっ♡♡

「あぁんっ♡」

ついに奏汰の唇は足の付け根までやってくる。

ちゅううううっ♡♡

「はうううっ♡♡♡」

足と腰の境目の部分を強く吸われ、ビクンと体が震えた。

ちゅうっ♡

最後に強く肌を吸ってから、奏汰は唇を離した。

そして、蜜がじわじわと染み出る秘裂をじっと見つめた。

奏汰の熱い吐息が陰部に吹きかかり、ゾクゾクと鳥肌立つ。

自分でもそれほどじっくりと見たことがない部分を、他人に、よりにもよって奏汰に見られるなんて……。恥ずかし過ぎて、どうにかなくなってしまいそうだ。

「やっ♡、見ないでっ」

咄嗟に両手で陰部を隠した。

すると奏汰は私の両手を優しく握り、手の甲にちゅっ♡とキスをした。

こうして上から奏汰の顔を見ると、意外と睫毛が長く綺麗な目をしていることに気づく。こんな最悪のシチュエーションなのに、おとぎ話の出てくる王子様が姫に誓いをたてるキスみたい、なんて一瞬思ってしまった、不覚にもときめいてしまった。

唇をゆっくりと離れた奏汰が、視線をあげた。

「——っ♡」

目があった途端、きゅん♡と子宮が跳ねた。

奏汰は私の指に唇を寄せた。

こちらを見上げたまま、ゆっくりと唇を開く。

そして、そのまま指先を口に含んだ。

ぬるりとした感触が指先を這う。

その感触に背中が鳥肌立つ。

「ああ……っ♡」

れろ♡れろ♡

ちゅうううっ♡♡

奏汰の舌が指を吸い上げる。

「あああゝっ♡♡」

知らなかった。

指だけでこんなに感じちやうなんて……♡♡

ちゅううっ♡

最後に強く吸い上げてから、奏汰は指から唇を離した。

「ああ……♡」

奏汰は私の両手をベッドの上にそっと置いてから、再び秘部の前に顔を寄せた。

「あっ♡、かなたっ……♡」

奏汰は舌をチロリと出し、私を上目遣いに見つめたまま、しつとりと濡れた花卉に舌を這わせた。

ぺろっ♡♡

「——っひゃああっ♡♡♡」

あまりの快感に私は背を仰け反らせて喘いだ。

れろ♡れろ♡♡

「あああんっ♡♡♡」

熱い舌がゆつくりとした動作で行き来する。

その舌の感触だけでなく、奏汰の綺麗な顔が足の間に埋まっているという光景が、さらに私の感度を上昇させた。

「あああゝっ♡はあんっ♡あああっ♡♡」

その舌は赤い花弁を器用にこじ開け、その奥に潜んでいた蜜口をペロリと舐め上げた。

「はあああんッ♡♡」

ビクッ♡と腰が宙に浮く。

ちゅっ♡と軽いキスを落としたかと思えば、ちゅうううゝっ♡♡と奏汰の唇が花液を吸い上げる。

「ああああゝゝゝっ♡♡」

容赦のない刺激にビクン♡ビクン♡と腰が痙攣する。

舌を陰部から離そうと、奏汰の頭を必死に押さえつけたけど、腕にまったく力が入らず、奏汰の短い髪が指先に絡むだけだった。

「あっ♡♡、んあっ♡♡……っ♡やめてっそんなところ♡♡なめちゃだめえっ♡♡」

ちゅうううっ♡♡

いやらしい水音をたてながら、奏汰が唇を離した。

「彼氏にはさせてたんだろ？ 何カマトトぶってんだよ」

奏汰の言葉に顔がカッと熱くなる。

「さ、されたことないよ、そんなこと」

そう答えると、時が止まったかのように奏汰が動きを止めた。

「……は？」

数秒遅れて、奏汰が怪訝そうな表情を浮かべる。

「嘘だろ？」

「う、うそじゃないもん」

私の言葉に、奏汰は本気で驚いたような顔をした。

「おいおい、まじかよ」

奏汰は独り言のように呟くと体をゆっくりと起こして、私の頭の両側に手をついた。奏汰の体が照明の明かりを遮り、視界が僅かに暗くなる。

奏汰は私を見下ろして言った。

「お前、フェラは？」

「……………へ？」

唐突な質問に私の理解が追いつかない。

「フェラだよ、フェラ、アイツにフェラしたのか？」

「なっ……………」

顔が熱くなる。

「なっ、なんでそんなことアンタに教えなきゃいけないの」

恥ずかしくて、奏汰から顔を逸らした。

「デリカシーなさすぎ！、そんなこと聞くななんて信じらんない！」

すると頭上からチツと舌打ちが聞こえた……かと思えば、突然、乳首をキュツと摘ままれてしまった。

「ひゃううつ♡♡」

ビクビク♡と腰が跳ねる。

無理矢理顎をグツと掴まれ、顔を正面に向けられてしまう。

「どうなんだ？ 答えろよ、したのか？ してないのか？」

何故か奏汰はひどく怒っていた。

どうしてこんなことで怒っているのか私にはわからなかった。

奏汰の目を見たくなくて、私は視線だけ逸らす。

「……………した」

消えるような声でそう答えると、やがて顎から手が離れた。

頭上から大きなため息が聞こえる。

再び視線を奏汰に戻すと、奏汰は後頭部をガリガリ搔きながらボソリと呟いた。

「……やっぱアイツ嫌いだわ」

そういえば、男女問わず比較的どんな相手とでもそれなりに愛想よく接する奏汰が、サクル長の直輝さんのことだけは何故か毛嫌いしていたことを思い出す。

「女にやらせといて自分はやらねーとか最低じゃん」

「ち、ちがう、ただ……」

フェラしてあげると直輝さんが喜ぶからやっていただけで、私のも舐めて欲しいなんて思ったことは一度もなかった。だから別に不満はなかった。

奏汰はぶっきらぼうに言う。

「は？　じゃあお前、フェラ好きなの？」

なんでそんな恥ずかしいこと平気で聞けるんだろう。

「べ、別に好きなわけじゃない……」

「ま、それはどっちでもいいや」

自分から質問したくせに、奏汰はすでに興味を失っているようだった。

「あの男が最低野郎だってことはわかった」

奏汰はそう言うのと、再び足の方に戻った。

「や、ちよつと、かなたっ……あうっ♡」

ペロリとまた秘裂を舐め上げられる。

「やっ♡、だめだって♡……ああ♡♡」

奏汰がグッと秘部に顔を近づける。

にゅぷぷっ♡♡

舌先が秘部に沈みこんだ。

「あっ♡、うそ♡……あああっ♡」

指とは違う、熱をもつ柔らかいものが差し込まれ、腰がビクンと震える。

じゅぷっ♡じゅぷっ♡じゅぷっ♡

舌を小刻みに動かしながら、内襲を刺激する。

「んあっ♡♡それだめえ♡♡……んんっ♡♡はああんっ♡♡」

こんなとこ舐められるなんて嫌なのに、恥ずかしいのに……♡♡

すごく感じちゃってるっ♡♡

「ああっ♡♡あん♡♡」

奥へ奥へと舌が差し込まれる。

それによって奏汰の鼻先がちょうどクリトリスを押し上げる形になってしまう。

「ああんっ♡♡♡♡だめえっ♡♡」

じゅぷ♡じゅぷ♡じゅぷ♡

奏汰が顔を動かす度に、鼻先がクリを押し上げる。

「はああんっ♡♡、クリにあたってるからあっ♡♡♡ああ〜♡♡だめええ♡♡」

にゅぷんっ♡舌が引き抜かれる。

奏汰の唇は私の愛液でグロスを塗ったみたいにぬらぬらとテカっていた。

それを見た途端、ドクンと心臓が跳ねる。

「だめとか言うわりに、めっちゃくちゃ感じてんじゃん」

そう言って奏汰はニヤリと笑った。

「ち、ちがつ……」

にゅぷっ♡♡

「あううっ♡♡」

言葉の途中で陰部に指が挿入されてしまう。

「やつ♡抜いてえっ……ああああっ♡♡」

抜くどころかもう一本指を増やされ、その指先はGスポットをぎゅうっ♡と押し上げた。

「そこ♡♡、だめになっちゃう♡、んあああ♡♡」

じゅぷっ♡♡じゅぷっ♡

指を抜き刺してナカを蹂躪しながら、またゆっくりと顔を足の付け根に近づける。

そして舌先で、赤く熟れた肉芽をペロリと舐め上げた。

「あああっ……♡♡♡」

ピクンッ♡と腰が宙に浮く。

奏汰は上目遣いで見ながら、舌先で小刻みにチロチロと肉芽を舐る。

「んああっ♡♡クリはだめえ♡♡」

私の反応を見て嬉しそうに笑った奏汰は、クリトリスを唇にすっぽりと収めた。

ちゅうう……っ♡♡

敏感なクリトリスを強く吸い上げられて、私は背を仰け反らせて喘いだ。

「はあああん♡♡♡、やめっ♡♡」

じゅるるっ♡ちゅっ♡ちゅうううっ♡

クリを執拗に吸い上げられながら、その間もGスポットを指で刺激され続けている。

「あああ♡♡♡、らめえ♡♡♡、い、いく♡♡いっっちゃう♡♡」
奏汰はふっと口元で笑った。

「ほら、いけよ」

再びクリに吸い付かれちゅ♡ちゅ♡と吸われる。

ちゅうううっ♡♡

じゅるるっ♡♡

ちゅううううううっ♡♡♡♡

「あっ♡、い、いくっ……♡♡」

最後にGスポットをぐいぐいと押し上げられ、私の体は強制的に高みへ引き上げられた。

「——っ♡♡、あああああああゝっ♡♡♡♡」

ビクンッ♡ビクンッ♡

腰が激しく痙攣する。

「ああっ……♡♡♡、はあっ♡ああ……♡♡」

ビクッ♡ビクッ♡

なかなか痙攣が止まらず、腰を痙攣させながら喘ぎ声を漏らした。

「はぁぁ……♡♡♡♡」

じゅぷっ♡

「あうっ♡」

奏汰の指が引き抜かれる。

「はぁ♡、はぁ……♡」

なかなか引いてくれない絶頂の余韻に息を切らしながら、奏汰のほうを見る。

「……」

奏汰は膝立ちになって私を見下ろしていた。

ふと奏汰が身につけているハーフパンツの中央部分に目がいく。

「——っ!?!♡♡♡♡」

それを目にした途端、子宮の奥がビクン♡と跳ねた。

ハーフパンツが内側から何かによって押し上げられ、大きく盛り上がっていた。

その盛り上がり方を見ても、そのサイズがとても大きいということは明らかだった。

「……っ♡♡」

思わず凝視したまま固まってしまう。

奏汰の雄としての本能が反応している。

その事実を突きつけられ私は困惑するしかなかった。

うそでしょ……。

奏汰、私のことは女としてみれねーって言ってたのに……っ♡

ドクドクドクと心臓の鼓動が早くなる。

心なしか呼吸もハァハァと荒くなり、子宮の奥がヒクヒクと震えていることに気づく。性的興奮を覚えている奏汰を目の当たりにしたことで、私も興奮してしまったのだ。

「わーい、限界だわ」

奏汰はそう呟くと、ベッドのヘッドボードに手を伸ばす。そして、小さな引き出しを開けると、そこから手の平サイズの箱を取り出した。

一目でそれと分かるデザイン。

コンドームの箱だった。

既に開封済みの箱から一個だけ取り出すと、箱をベッドの上にポイッと放り投げた。

そしてハーフパンツとボクサーパンツを太股までずり下げた。

「——っ♡♡」

私は思わず息を呑んだ。

下から現れたのは、赤黒く隆起した肉棒だった。まっすぐに伸びたそれは長さ太さを兼ね備えていて、その先端は大きくエラが張っている。竿の部分は血管がピキピキと浮かび上がっている。直輝さんのモノとは比べものにならないくらいのサイズだった。

う、うそでしょ……♡♡

その大きなペニスを目の当たりにして、ドクドクと心臓が激しく脈を打っていた。

奏汰はコンドームの袋を唇で挟むと、器用に片手で封を切り、いきり立ったペニスに慣れた手つきで装着した。

そして、奏汰は私の膝をグッと持ち上げた。

「やっ♡」

腰がわずかに宙に浮く。

奏汰は私の両足を肩の乗せて担いだ。

「ちょ、か、かなた、まって！……あんた、ほ、本気なの？」

「ここまでやっという挿入なしはないだろ」

奏汰はそう答えて薄く笑うと、陰茎の根元を掴んだ。

そしてその先端をしつとりと濡れた秘裂に押し当てる。

「やっ♡♡」

熱いモノが蜜口にぎゅうっ♡と押し当てられた瞬間、目眩がした。

「う、うそでしょ、ま、まって」

颯太は獲物を狙う肉食獣のような目で私を見下ろす。

「……は？ 待て？ 俺がどれだけ待ったと思ってんだよ」

「それどういう意味、……あああっ!!♡♡♡」

奏汰がグッと腰を落とすと、にゅぷっ♡♡とその先端が蜜口に沈みこんだ。

「やっ♡♡、だめ♡♡、ほんとにだめっ♡♡、おねがい、ま、まって！」

「待てない」

間髪を入れず、奏汰は腰を押し進めた。

にゅぷぷっ♡♡♡

「……っ♡♡♡♡、あああゝゝゝっ!!♡♡」

指とは違う、圧倒的な質量を持ったモノが中に侵入してくる。

やだ、うそでしょ♡♡

奏汰のが入ってるっ……♡♡

「んっ♡……はあああっ♡♡」

ミチミチと肉壁を押し広げながらゆっくりと進んでいく。その圧倒的な存在感に腰がブルブルと震えてしまう。

やだ、なにこれ♡♡

大きすぎる……♡♡こんなの無理だよお♡♡

「はっ……、きつ」

半分ほど肉棒が沈んだところで、奏汰は腰の動きを止めた。

私を見下ろして奏汰が言う。

「……おい、力抜けよ」